

芥川龍之介

野人生計事



野人生計事

一 清閑

らんざんたいりぼうろをむすぶ
乱山堆裡結茅蘆

すでにこうじんとともにあとうやくそなり

已共紅塵跡漸疎

とうなかれやじんせいけいのこと

莫問野人生計事

そうぜんのりゆうすい

窓前流水枕前書

とは少時漢詩なるものを作らせられた時度たびお手本の役をつとめた李九齡の七絶である。今は子供心に感心し

たほど、名詩とも何とも思っていない。乱山堆裡に茅蘆を結んでいても、恩給証書に貯金の通帳位は持っていたのだろうと思っっている。

しかし兔とに角李かく九齡は窓前の流水と枕前の書とに悠々たる清閑を領している。その点は甚はなはだ羨ましい。僕などは売文に餬口する為に年中匆忙たる思いをしている。ゆうべも二時頃まで原稿を書き、やっと床へはいったと思ったら、今度は電報に叩き起された。社命、僕に「サンデー毎日」の随筆を書けと云う電報である。

随筆は清閑の所産である。少くとも僅わずかに清閑の所産

を誇っていた文芸の形式である。古来の文人多しと雖いえども、未だ清閑さえ得ないうちに随筆を書いたと云う怪物はない。しかし今人は（この今人と云う言葉は非常に狭い意味の今人である。ざっと大正十二年の三、四月以後の今人である）清閑を得ずにもさっさと随筆を書き上げるのである。いや、清閑を得ずにもではない。寧むしろ清閑を得ない為に手つとり早い随筆を書き飛ばすのである。

在来の随筆は四種類である。或あるいはもつとあるかも知れない。が、ゆうべ五時間しか寝ない現在の僕の頭によると、第一は感慨を述べたものである。第二は異聞を録

したものである。第三は考証を試みたものである。第四は芸術的小品である。こう云う四種類の随筆にレエゾン・デエトルを持たないと云うものは滅多にない。感慨は兎に角思想を含んでゐる。異聞も異聞と云う以上は興味のあることに違いない。考証も学問を借りない限り、手のつけられないのは確たしかである。芸術的小品も——芸術的小品は問うを待たない。

しかしこう云う随筆は多少の清閑も得なかつた日には、たとひ全然とは云わないにしろ、そうそう無暗に書けるものではない。是に於て乎、新しい随筆は忽たちまち文

壇に出現した。新しい随筆とは何であるか？ 掛け値なしに筆に随ったものである。純乎として純なる出たらめである。

もし僕の言葉を疑うならば、古人の随筆は姑しごく問わず、まず「観潮楼偶記」を読み或は「断腸亭雜稟」を読み、次に月々の雑誌に出る随筆の大半と比べて見るがよい。後者の孟浪杜撰なることは忽ち瞭然となるであろう。しかもこの新しい随筆の作者は必しも庸愚の材ばかりではない。ちやんとした戯曲や小説の書ける（一例を挙げれば僕の如き）相当の才人もまじっているのである。

随筆を清閑の所産とすれば、清閑は金の所産である。だから清閑を得る前には先ず金を持たなければならぬ。或は金を超越しなければならぬ。これはどちらも絶望である。すると新しい随筆以外に、ほんものの随筆の生れるのもやはり絶望という外はない。

李九齡は「莫問野人生計事」といった。しかし僕は随筆を論ずるにも、清閑の所産たる随筆を論ずるにも、野人生計の事に及ばざるを得ない。況いわんや今後もせち辛いことは度たび弁ぜずにはいられないであろう。かたがた今度の随筆の題も野人生計の事とつけることにした。勿

論これも清閑を待たずにさっさと書き上げる随筆である。もし幾分でも面白かったとすれば、それは作者たる僕自身の偉い為と思つて頂きたい。もし又面白くなかつたとしたら——それは僕に責任のない時代の罪だと思つて頂きたい。

二 室生犀星

室生犀星の金沢に歸つたのは二月ばかり前のことである。

「どうも国へ帰りたくてね、丁度脚氣になったやつが国の土を踏まないと、癒らんと云うようなものだろうかね。」

そう言つて歸つてしまつたのである。室生の陶器を愛する病は僕よりも膏肓にはいつている。尤も御同様に貧乏だから、名のある茶器などは持つていない。しかし室生のコレクションを見ると、ちゃんと或趣味にまとまつている。云わば白高麗も画唐津も室生犀星を語つてゐる。これは当然とは云うものの、必しも誰にでも出来るものではない。

或日室生は遊びに行つた僕に、上品に赤い唐草の寂びた九谷の鉢を一つくれた。それから熱心にこんなことを云つた。

「これへは羊羹を入れなさい（室生は何々し給えと云う代りに何々しなさいと云うのである）。まん中へちよつと五切ればかり、まっ黒い羊羹を入れなさい。」

室生はこう云う忠告さえせずには氣のすまない神経を
持っているのである。

或日又遊びに来た室生は僕の顔を見るが早いか、団子坂の或骨董屋に青磁の硯屏の出ていることを話した。

「売らずに置けと云つて置いたからね、二、三日中にとつて来なさい。もし出かける暇がなけりや、使でも何なんでもやりなさい。」

宛然僕にその硯屏を買う義務でもありそうな口吻である。しかし御意通りに買ったことを未だに後悔していないのは室生の為にも僕の為にも兎に角欣懐と云う外はない。

室生はまた陶器の外にも庭を作ること愛している。石を据えたり、竹を植えたり、叡山苔を匍わせたり、池を掘ったり、葡萄棚を掛けたり、いろいろ手を入れるの

を愛している。それも室生自身の家の室生自身の庭ではない。家賃を払っている借家の庭に入らざる数寄を凝らしているのである。

或夜お茶に呼ばれた僕は室生と何か話していた。すると暗い竹むらの蔭に絶えず水のしたたる音がする。室生の庭には池の外に流れなどは一つもある筈はない。僕は不思議に思ったから、「あの音は何だね？」と尋ねて見た。

「ああ、あれか、あれはあすこのつくばいへバケツの水をたらしてあるのだ。そら、あの竹の中へバケツを置

いて、バケツの胴へ穴をあけて、その穴へ細い管をさして……」

室生は澄まして説明した。室生の金沢へ帰る時、僕へかたみに贈ったものはこういう因縁のあるつくばいである。

僕は室生に別れた後、全然そういう風流と縁のない暮しをつづけている。あの庭は少しも変っていない。庭の隅の枇杷の木は丁度今寂しい花をつけている。室生はいつ金沢からもう一度東京へ出て来るのかしら。

三 キュウピツド

浅草という言葉は複雑である。たとえば芝とか麻布とかいう言葉は一つの観念を与えるのに過ぎない。しかし浅草という言葉は少くとも僕には三通りの観念を与える言葉である。

第一に浅草といいさえすれば僕の目の前に現れるのは大きい丹塗りの伽藍である。或^{あるい}はあの伽藍を中心にした五重塔や仁王門である。これは今度の震災にも幸と無事に焼残った。今ごろは丹塗りの堂の前にも明るい銀杏

の黄葉の中に、不相変鳩が何十羽も大まわりに輪を描が
 いていることであろう。

第二に僕の思い出すのは池のまわりの見世物小屋であ
 る。これはハヤシヤ悉く焼野原になった。

第三に見える浅草はつつましい下町の一部である。花
 川戸、山谷、駒形、蔵前——その外何処でも差支えない。
 唯雨上りの瓦屋根だの、火のともらない御神燈だの、花
 の凋んだ朝顔の鉢だのに「浅草」の作者久保田万太郎君
 を感じられさえすれば好いのである。これも亦また今度の大
 地震は一望の焦土に変らせてしまった。

この三通りの浅草のうち、僕のもう少し祇徊したいのは、第二の浅草、——活動写真やメリイ・ゴウランドの小屋の軒を並べていた浅草である。もし久保田万太郎君を第三の浅草の詩人とすれば、第二の浅草の詩人もない訳ではない。谷崎潤一郎君もその一人ひとりである。室生犀星君も亦その一人である。が、僕はその外にもう一人の詩人を数えたい。というのは佐藤惣之助君である。僕はもう四、五年前、確か雑誌「サンエス」に佐藤君の書いた散文を読んだ。それは僅か数頁にオペラの楽屋を描がいたスケッチだった。が、キュウピッドに扮した無

数の少女の廻り梯子を下る光景は如何にも潑刺としたものだった。

第二の浅草の記憶は沢山ある。その最も古いものは砂文字の婆さんの記憶かも知れない。婆さんはいつも五色の砂に白井権八や小紫を描いた。砂の色は妙に曇っていたから、白井権八や小紫もやはりもの寂びた姿をしていた。それから長井兵助と称した、蝦蟇の脂を売る居合抜きである。あの長い刀をかけた、——いや、こういう昔の景色は先師夏目先生の「彼岸過迄」に書いてある以上、今更僕の悪文などは待たずとも好いのに違いない。その

後ろは直ちに水族館である、安本亀八の活人形である、或は又珍世界のX光線である。

更にずっと近い頃の記憶はカリガリ博士のフィルムである。(僕はあのフィルムの動いているうちに、僕の持っていたステッキの柄へかすかに糸を張り渡す一匹の蜘蛛を発見した。この蜘蛛は表現派のフィルムよりも、数等僕には気味の悪い印象を与えた覚えがある)。さもなければロシアの女曲馬師である。そう云う記憶は今になって見るとどれ一つ懐しさを与えないものはない。が、最も僕の心にはつきりと跡を残しているのは佐藤君の描いた光景であ

る。キュウピッドに扮した無数の少女の廻り梯子を下る光景である。

僕も亦或晩春の午後、或オペラの楽屋の廊下に彼等の一群を見たことがある。彼等は佐藤君の書いたように、ぞろぞろ廻り梯子を下って行つた。薔薇色の翼、金色の弓、それから薄い水色の衣裳、——こう云う色彩を煙らせた、もの憂いパステルの心もちも佐藤君の散文の通りである。僕はマネジャアのN君と彼等のおりるのを見下しながら、ふとその中のキュウピッドの一人の萎れているのを発見した。キュウピッドは十五か十六であろう。

ちらりと見た顔は頬の落ちた、腺病質らしい細おもてである。僕はN君に話しかけた。

「あのキュウピュドは悄気ていますね。舞台監督にでも叱られたようですね。」

「どれ？　ああ、あれですか？　あれは失恋しているのですよ。」

N君は無造作に返事をした。

このキュウピツドの出るオペラは喜歌劇だったのに違いない。しかし人生は喜歌劇にさえ、——今更そんなモラルなどを持ち出す必要はないかも知れない。しかし

兎に角月桂や薔薇にフット・ライトの光を受けた思い出
の中の舞台には、その後もずっと影のようにキュウピッ
ドが一人失恋している。……

（大正十三年一月）

日本文学電子図書館

「芥川龍之介随筆集」

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

2014年3月14日 第1刷発行



日本文学電子図書館